

結果は天命を待つのみ

灰色雁の飼育で世界的に有名な動物学者、コンラード・ローレンツ博士の実験報告によりますと、「3つの水槽の生物に、同時に同じ肥料を入れて同じように育てても、その結果が3つとも全く異なった状態になることがある」と言っています。

例えば、3つの水槽に全く同じように2種類の藻を入れて、それを全く同一の条件で育てた場合でも、Aの水槽では片方の藻だけが勢いよく茂り、他方の藻はそれに圧倒されてしまっています。ところが、Bの水槽では勢力の状態がAの水槽と全く反対になっているのです。しかもCの水槽では、両者の勢いが全く均衡していて、適当に共存している、……というように三者が三様になることがある、というのです。

このような事実があるのです。だから、「同じように育てたのに、兄は良い子に育ち、弟は悪い子になった」という親の嘆きをよく耳にしますが、人間の成長には、藻の成長などよりもずっと複雑な条件があって、それが微妙な働きをしているのです。同じように育てたのに全く異なった人間になってしまっても、決して不思議ではないのです。

だから、人間の教育においては、「このような育て方をすれば、必ずこのような立派な子供になる」と言えるような教育法はこの世に存在しない、ということです。ただ「このような育て方をすれば良い子になる可能性が高い」ということだけのことに過ぎません。この事実、教

育には明らかに限界があることを私たちに教えてくれています。

前に述べた「何もせずにはほっておいたのに良い子になった」という例も、そういう意味であり得るのですが、「だから、ほっておいた方がよい」ということにならないことは、言うまでもなくおわかりのことと思います。

ほっておいても良くなることの可能性は極めて低いのですから、それを期待するのは愚かであり、怠惰です。かと言って、わが子の教育に努力したのにその結果が良くなかった、と言って天を恨むのも間違っています。

“人事を尽して天命をまつ”

という諺がありますように、人は、人として出来る最善の努力を尽すべきであって、その結果の良し悪しは天命に任せるしかないのです。それなのに世の中には「ほっておいて良くなる」ことを期待し、力の出し惜しみをする人の何と多いことでしょう。

最小の努力で最大の結果を得ることが最良だと思っているのかも知れませんが、無駄を省けばそれだけ残る物資と違い、人間の精力は使えば使うほど湧き出てくるもので、使わないでいればその分残るところか、逆に萎縮してしまうものです。

だから、力の出し惜しみくらい勿体ないことはありません。我こそは“最良の教師”であるという自信をもって、わが命よりも大事なわが子のため、最善の努力を尽されますよう期待して、筆をおきます。

(「母と子の新聞」昭和56年4月～57年8月)